

国語

粘り強く文章に向き合う子どもを育む授業づくり

—第6学年「きつねの窓」の実践を通して—

瀨山真悟

1 はじめに

国語科の学習は、子どもたちの将来に必要な力をつけるために欠かすことのできないものである。

学習指導要領にも、小学校低中学年の国語科の授業において基礎的な力を定着させた上で、各教科の学習活動に取り組む必要があることが記されている¹⁾。

しかし、国語科は算数科や社会科などの他教科と比べて何を学ぶものなのか明確になりにくく、有用感を得にくい側面がある。

野口(2010)は、国語科が一番大切な教科だと多くの人が自覚しており、多くの授業数を経るにも関わらず効力感が少ないことを挙げ、国語科は知っていることのおさらいをする確認型の授業が多いことを課題としている²⁾。

そして担当学級のアンケート調査(平成26年9月3日実施, 39名)においてもその傾向を見てとることができた。なかでも、読む学習においては、読書は好きだが、何度も同じ文章を読む国語科の読みの授業にあまり意味を感じられていない子どもが38%いることが分かった。それは、何度も読むことで得られる読みの変容や、新たな発見をしたときの高揚感、分からない文章を分かるまで読みこんだ経験が乏しいからであると考えられる。繰り返し文章を読み返し、粘り強く文章に向き合うことで、文章を読むことがおもしろく、学ぶことが楽しいと感じられる子どもを育てたいと考えた。

そのために、繰り返し読むことのよさ、粘り強く読むことの大切さを感じられる授業の開発を行い、子どもたちの発言や姿から学習内容について考察を行う。

2 授業開発のねらいと具体的な方策

(1) ねらい

繰り返し読むことのよさを感じさせる。

(2) 具体的な方策

初読で得た文章(読書と同じ読み)の読みをゆさぶり、新たな文章の読みと出合わせる。

(3) 教材について

「きつねの窓」(安房直子 学校図書6下)は主人公のぼくがきつねと出会い、指を染めてもらうことで不思議な窓を手に入れ、その後その窓を失っていく様子が描かれている。登場人物の性格の捉え方や作品の終わりをハッピーエンドと捉えるかどうかで、作品から感じられるものが大きく変わる。そのことから一人ひとりの一面的な読みを全体で交流して、多面的に物語を捉えることができれば、何度も楽しみながら読むことができると考える。

(4) 子どもたちが初読で得た文章の読みと、新たに出会わせたい読み

※質問は自由記述とし、記述から教師が下記の表のように分類した。

①きつねの窓は素敵なものか

素敵なもの	34名
素敵なものではない	4名
どちらとも言えない	1名

多くの子どもが、きつねの窓を素敵なものとして捉えており、素敵ではないものと捉えた子どもは、自分には必要のないものとして、客観的に窓を見ている傾向があった。主人公はきつねの窓を受け取ったとき、そして現在もきつねの窓は素敵

なものであると感じている。しかし客観的な視点を加えると窓は、寂しさを補ってくれる面と、窓に依存し過去にとらわれてしまう面があると考えられる。窓を多面的に見ることで、窓のイメージを広げさせることができるようにする。

②きつねの性格について

いい性格	37名
悪い性格	1名
どちらとも言えない	1名

きつねの窓を素敵ものと捉えるかどうかで、それをくれたきつねの性格も大きく変わると考えていた。やはり、多くの子どもがきつねを「やさしい、親切、人懐っこい」と捉えていた。きつねは「主人公をだました」と考えた一人だけが悪い性格と捉えていた。

きつねは、鉄砲を手に入れていること、しかもその鉄砲は主人公がくれると言ったわけではなく、きつねがほしいと言っていることから、きつねのねらいに気づかせ、新たな読みと出会わせることができるようにする。

③このお話はハッピーエンドかどうか

ハッピーエンドである	9名
ハッピーエンドではない	29名
どちらとも言えない	1名

きつねの窓をいいものとして捉えている子どもが多くいるため、その窓を失ってしまったこと、その後きつねに会えなかったことから、ハッピーエンドではないと捉えていた。

「きつねの窓」の最後の2行には、主人公がよく笑われるという記述がある。もちろん、主人公が過去を語る形式になっているため、最後の2行は必要であるという考えもあるが、その2行がなくても物語は成立する。そのことを子どもたちと考える中で、主人公の周りには笑ってくれる仲間がいて、主人公はひとりぼっちではないことに気づかせ、新たな読みに出会わせることができるようにする。

3 実践事例

(1) 単元の概要

①単元名

「きつねの窓」(安房直子 学校図書6下)

②学級 6年1組 39名

③実施時期 2014年10月～11月

④単元構成

第1次 これまで学習した物語(白いぼうし)の
 主題は?・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

第2次 「きつねの窓」を読む(大筋をとらえる読み)・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

第3次 新たな読みとの出会い

- ・きつねの窓は素敵なものか 2時間
- ・小さい窓に映った少女は妹か 1時間
- ・きつねの性格について 1時間
- ・このお話はハッピーエンドか 1時間

第4次 「きつねの窓」の主題・・・1時間

(2) 授業の実際(第3次 新たな読みとの出会い)

①きつねの窓は素敵なものか

初読後のアンケート(きつねの窓は素敵なものか)の記述に主に以下のようなものがあった。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・自分の思い出が見える。 ・会いたい人に会える。 ・心のさみしさを補い、幸せにしてくれる。 ・一番つらい思い出が見える。 ・過去を思い返すことができるから、<u>欲しい</u>。 ・<u>欲しくない</u>。まだ自分には必要ない。 |
|--|

対立する意見として、窓が欲しいと考えた子どもと欲しくないと考えた子どもがいた。そこで窓が素敵なものとして描かれているのかどうかを考えた上で欲しいか欲しくないかの結論を自分たちの中で導き出すこととした。授業の初めに挙手を求めると結果は以下の通りであった。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・きつねの窓が欲しい・・・30名 ・きつねの窓は欲しくない・・・8名 |
|---|

まずは、きつねの窓のつくりの特徴を出し合った。

- ・ききょうの汁を用いてつくる。
- ・両手の親指と人差し指の4本でつくり、ひし形の形。
- ・何度も見られる。
- ・自分が大切に思っているものが映る。
- ・洗えば消える。洗わなければ消えない。
- ・動画、静止画、音が聞こえる。

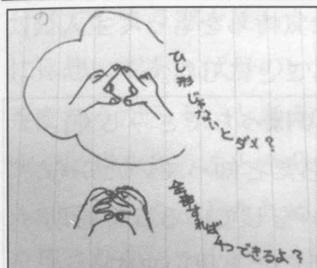


図1 子どもの絵

なかでも、形や指の数について疑問をもった子どもの絵から、ひし形の理由と、4本の指で窓をつくる理由について議論が起こった。

A児 全部の指を染めたら、ひし形じゃなくてもいいね。

B児 4つも窓が出来るし、おもしろいかも。

C児 なんで4本の指で、ひし形なんだろう。丸だと映らないのかな。

沈黙…

C児 ききょうの花は「あなたの指をお染めなさい。」としか言ってない。4本の指については言っていないから、きつねが勝手に決めたんだよ。

D児 でも「あなたの指をお染めなさい。」だから、指だけではなく手を全部塗るのはおかしいよ。

E児 親指と小指では、窓の中に人差し指や中指で触れることができるから、親指と人差しにしたんじゃない？

F児 窓をひっくり返すと、きつねの顔の輪郭に似ているからかもしれないね。

きっかけは、なんとなく描いた子どもの絵(図1)で、話す内容には想像が多く含まれるが、きつねの窓のつくりについて着目していなかった子どもには、このやりとりは新鮮で、新たな読みとの出会いとなっていた。

また、きつねの窓には静止画しか映らないと読み取っていた子どもと、動画も映ると考えていた子どもで議論が起こった。

静 「ちょうど一枚のきつねの絵がぴたりとはめ込まれたような感じ」と書かれている。絵だから動いていないと思う。

動 そのまえに「しっぽをゆらりと立てて」と書いてあるよ。

動 「雨が降っています。細かい霧雨が音もなく。」とあるから、雨が降っている様子を静止画で音も無く表現するのは難しいと思う。ここで音があれば、静止画に音を足して雨を表現できるかもしれないけど、やはり動画も映ると考えるほうが自然。

静 私は反対意見で「子どもの長ぐつがほうり出されていて、雨にぬれています。」とか「青じそがひとかたまり、やっぱり雨にぬれています。」と書かれていて、雨の音が無くても、雨が降っていることは表現できると思う。

この動画と静止画の議論では、子どもたち全員が納得をもって、どちらの読みが妥当であるか結論を出すまでには至らなかった。しかし、それぞれの立場で読みの根拠を文中から見つけていた。

その後、きつねの窓は素敵なものとして描かれているのかどうかを考えた。

素敵なものとして描かれている

- ・ひとりぼっちじゃなくなる(きつね・ぼく)。
- ・さみしくなくなる(きつね)。
- ・おどり上がる(ぼく)。

素敵なものとして描かれていない

- ・うつむく(きつね)。
- ・せつなくなる(ぼく)。
- ・いい思い出ばかりではない。

これらの情報を本文から取り出し、

素敵なものとして捉えた

- ・支えとなり元気になる。
- ・いつも見て強くなる。

素敵なものではないと捉えた

- ・一度見れば十分で、それ以上見ると頼ってしまう(依存)。
- ・いつも見ていると弱くなる。

・人には必要の無いもの。

ときつねの窓を捉えた。また、きつねの窓にはどのようなものが映るのかも考えた。

きつねがつくった窓

・母きつね

ぼくがつくった窓

・もう決して会うことの出来ない少女

・昔住んでいた家・家族

映ったものの特徴から、どのようなものが映ると考えられるかの意見を出し合うと五つの意見が出た。そのうち三つは妥当であろうという結論になった。

・死んだ人，なくなったもの

・身近で家族のような存在

・会ったことのある，見たことのあるもの

・悔いが残っている人，もの，こと

・窓をつくる前に考えていたこと

・昔のことが映る ※枠有りが妥当

窓が素敵なものかどうか考えた後、きつねの窓がほしいかどうかを聞くと

・きつねの窓が欲しい…12名

・きつねの窓は欲しくない…27名

という結果となり、授業前とは大きく結果が変わっていた。

②きつねの性格について

授業前にきつねの性格について尋ねると、初読後のアンケートと比べて、きつねがいい性格であると捉えている子どもたちの数が減り、悪い性格であると捉えている子どもの数が増えていた。きつねの窓について考えたことが、きつねの性格の捉えに影響したようである。

いい性格	20名
悪い性格	17名
どちらとも言えない	2名

そこで、まずはきつねの性格を出し合うことにすると以下のものが出てきた。

○やさしい

○人懐っこい

○正直者

○おっとり

○母想い

×人をだます

×ずるがしこい

×意地悪

×悪巧み

×さみしがりや

次に、きつねはどんな気持ちをもって主人公に接しているのかを考えることにした。

A児 きつねは、ひとりぼっちでさみしく、ぼくもひとりぼっちだと知っていたから、同じさみしい思いをしているぼくを助けたいと思っていたのだと思います。

B児 そういう思いもあると思うけれど、鉄砲がほしかったのだと思います。

C児 付け加えて、選択肢の中になかった鉄砲をほしいときつねが言っているから、染めたいというよりも鉄砲がほしかったのだと思います。

D児 鉄砲もお金もきつねの世界に必要なと思うんだけど…

E児 母の敵をうつために鉄砲がほしかったのだと思います。ぼくが母を撃ったかは分からないけどおそらくぼくは獵師だから。

F児 でも、きつねはぼくを撃ってないよ。

G児 鉄砲をとることで、母のような悲しい思いをする動物を減らしたいのだと思います。

H児 じゃあ、きつねってやさしいね。

I児 中間の動物には優しいけど、ぼくにはやさしくないんじゃない。

J児 私は窓をいいものだと思っていて、それをくれたから、ぼくにもやさしいと思います。

K児 でも窓をなくした後に会ってくれてないよ。やさしかったら、もう一度会って、窓をくれるんじゃないの。

きつねの窓の捉えが前時の段階で共通なものとなっていなかったため、話し合いは複雑なものとな

なった。

ここで、新たな読みを子どもたちの中から引き出すのは難しいと考え、一つの読みとして教師の読みと、昨年の6年生が導き出した読みを紹介した。教師の読みは、きつねは「いい性格である」「きつねの窓は人にとって悪いものである」として、きつねは鉄砲をもらうために人を過去に縛り付けてしまう窓を使った。しかし「主人公が本当に母思いであれば母のいっつけを良く守るため、手を洗うだろう」と考えていた。つまり、ぼくがすぐに窓を失うことを分かっている、鉄砲を手に入れて目的を達したため、ぼくの前には二度と姿を現さなかったというものである。

昨年の6年生の読みは、きつねが再び会いに来なかったのは、来られなかったというものである。その理由はきつねがやさしい・やさしくないという問題ではなく、ぼくからもらった鉄砲で、大好きな死んだ母のもとに旅立ったからだというものである。

子どもたちの反応を見ると、どちらの読みもこれまでもっていなかったようであった。

授業の最後にアンケートをしてみると

いい性格	14名
悪い性格	10名
どちらとも言えない	15名

という結果となった。

③このお話はハッピーエンドかどうか

授業前にこの物語の終わり方について質問すると、初読後に比べてハッピーエンドだと思う子どもとどちらとも言えないと思う子どもの数が少し増えていた。

ハッピーエンドである	10名
ハッピーエンドではない	16名
どちらとも言えない	13名

そこで、まずは多くのお話の流れとして「不幸→幸せ」「幸せ→不幸」が多いことを示した。そして主人公がはじめは不幸であったか幸せであったかを考えさせた。

ここは、全員一致で主人公は不幸であると答え

た。理由としては、ひとりぼっちであること、ぼんやりと歩いていたことを挙げた。そこで、おそらく幸せになるだろうという見通しをもって結末部分に着目させた。

A児 「一度もきつねにあうことはありませんでした。」とあるから、やはり不幸のままです。

B児 僕は指で窓を作っていて、まだ過去にとらわれているから不幸のままだと思います。

C児 「ひょっとして」とあるから、そんなに本気で窓をつくらうとはしていません。ふざけてやっているだけだと思います。

D児 でも、それで人に笑われていて、やっぱりかわいそう。不幸だと思います。

沈黙…

教師 ぼくはなぜ不幸だったのでしょうか。

全員 ひとりぼっちだったから

沈黙…

教師 ぼくはひとりぼっちのままですか。

E児 笑われているから、周りに人がいる。

F児 ひとりぼっちじゃなくなっているね。

G児 だから、本気で窓を作る必要がなくなっただね。

ここで、主人公がはじめはひとりぼっちだったが、最後はひとりぼっちではなくなっているという変化を読み取り、「きつねの窓」という作品はハッピーエンドであると全員が共通理解をもって授業を終えた。

4 事後アンケートの結果と考察

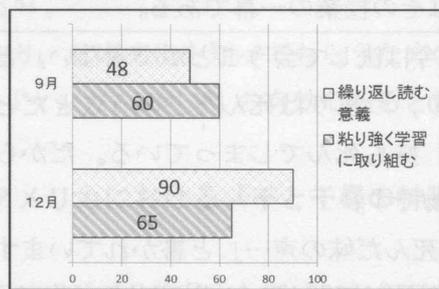


図2 国語科の学習に関わるアンケート結果

一人で読むだけでは出会えない新たな文章の読みに出会わせることは、文章を繰り返し読むことよさを感じさせる上でとても有効な手立てであったといえる。子どもたちは自分たちで読み、自分たちで考え、それが楽しかったと振り返っている。

仲間の読みを理解するためや自分の読みを確固たるものにするために、繰り返し読み、粘り強く文章に向き合う必要性が生まれたようである。

授業をつくっていく上で課題も見えてきた。意見を対立させて考えさせることである。子どもたちの主体性を引き出す面で、大きな効果があることには間違いない。しかし対立に無理が生じたり、子どもたちの思考の流れに沿わない形になってしまったりすることがある。何より、物語では言葉や人物の一つ一つの捉えにずれが生じ、共通理解をもって話し合いを進めることが困難となり、話し合いが成立しないことが起こった。多くの子どもたちの考えを整理して、互いの読みを理解しながら話し合いを進めることができる授業づくりを考えていかなければならない。

5 終わりに

事前に教師が会わせたいと考えていた読み以外にも、様々な読みが生まれた。

主人公の窓に映った少女が、ぼくの妹と同一人物であるというものである。そしてそのことについて、みんなで話し合いたいという子どもからの申し出があった。読むこと、仲間の読みを知ることを楽しんでいるのだと感じた。

以下はその授業的一幕である。

同 「今は決して会うことができない」と書いてあり、つまりは死んだということだと思います。妹も死んでしまっている。だから、同一人物です。

同 「死んだ妹の声…」と書かれていますが、家族全員が死んだとは書かれていません。妹の死だけを強調しているのは、妹への想いが

強いからだと思います。そして「昔大好きだった女の子」とその想いが重なると思います。別 妹なら「見覚えのある顔」とは書かない。別 「やあ、あの子じゃないか」とおどりがあって喜んでいる。我を忘れて喜んでいるときに「妹」と言わず「あの子」と言うのはおかしい。

同 このお話は僕の語りで進んでいて、今は冷静に語っているから、あえてそう言ったのだと思う。

別 「決して会うことができない少女」は死んでいません。会えないのは、少女のときの女の子で、その女の子は今も大人として生きています。ただ、ぼくは大人になったその人ではなく、少女のときのその人に会いたいのだと思います。

別 私は理由が違います。普通、人は死んでその存在の大きさを感じます。もし同一人物ならば妹のことを昔大好きだったとは言いません。昔よりずっと今のほうが妹のことが好きだからです。

同一人物であるという読みは、塚田(2001)も、死んだ妹と「窓」に映った少女が同一人物であるかもしれないが、別人であればより味わい深いものになると述べている³⁾。しかし子どもたちの理由がおもしろい。私はまったく考えつかなかった。これだから、子どもたちと授業をするのは面白いと思う。

<参考文献>

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 総則編」, p. 2, 2008, 東洋館出版社。
- 2) 野口芳弘:「野口芳弘の国語授業の作り方」, pp. 7-10, 2010, 東洋館出版社。
- 3) 塚田泰彦:「異次元を生きる学習者の物語能力の追跡」, 田中実・須貝千里編著「文学の力×教材の力 小学校編6年」, p. 144, 2001, 教育出版。